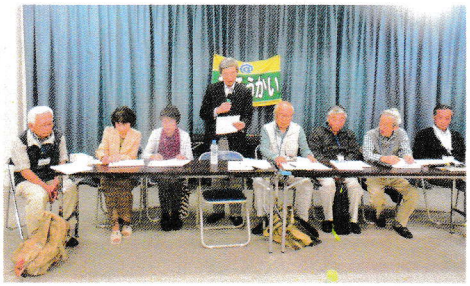
あ・そうかい 会報
第13号
2018年5月28日
発行：あ・そうかい
編集： 運営委員会

あ・そうかい通信

総会開催・第四期体制 発足！

平成29年度を締めくくる総会が4月23日、麻生市民交流館やまゆりで開かれ、選出された新運営委員のもと、引き続き行われた30年度第一回例会で、創立4年目の活動が幕を開けた。



新運営委員

会員数55名で迎えた30年度。分科会が合わせて15にまで増えたことが示すように、会の活動はいっそう活発さを増している。今年度はその内容もさらに幅を広げていきそうだ。飯塚敏洋新会長も就任挨拶で「活動拡大へ積極的な参加を」と力強く呼びかけた。

（文・佐藤次郎）

新運営委員

会　長　飯塚敏洋
副会長　瀬領浩一
会　計　岩田輝夫
庶　務　二本柳達丸
　　松崎朝子
　　山崎典明
　　山下宏子
事務局　植木昌昭

新会長就任挨拶

飯塚敏洋

この度、小池前会長からバトンを受け継ぎ会長を務めることになりました飯塚敏洋です。新運営委員ともども1年間宜しくお願いします。

飯塚会長

早いもので「あ・そうかい」が発足して丸3年経過しました。その間に、会員数は当初の28名から55名までに倍増し、分科会は15を数えるまでになり、増々活況を呈しています。これは、ひとえに会員一人ひとりが「あ・そうかい」を自分たちの手で育てようという熱い思いを共有しているからだと思います。

「あ・そうかい」は、例会、暑気払い、新年会、文化祭、@サロン、各種分科会など多岐にわたる活動を行っています。これらの活動に積極的に参加すれば多くの仲間に巡り合うことができます。また、これまで参加することに躊躇していた活動があれば思い切って参加してみて下さい。必ず得るものがある筈です。

まず参加してみようという前向きな姿勢こそが人を輝かせます。「あ・そうかい」は小さいながらも一つのまとまったコミュニティーであり、活動拠点であり、居場所そのものです。居場所探しに苦労している我々シニア世代にとって自分の居場所があるということは素敵なことではないでしょうか。

会員の皆様ぜひ「あ・そうかい」を更に魅力溢れた楽しい居場所にしていきましょう。

魚眼・複眼

厚労省が2015年の市区町村別の平均寿命を公表した。麻生区は83・1歳ということで、青葉区に抜かれ全国2位ということになりましたが、「麻生区が長寿一番妻くもる」という川柳が思い出されます。これからは、医療の進歩により平均寿命はますます伸びることが予想され、私どもは未知の世界に突き進んでいくわけです。平均寿命は時間の量といえます。私たちは時間の量については満足できるのではないでしょうか。

生物学的にいうと耐用年数を終えているわけですので（笑い）。健康寿命は時間の質といえます。これからは、やはり時間の質について考えたいと思います。幸い、「あ・そうかい」のメンバーはポジティブな方が多くて、質を高めるには不自由なことはありませんね。キーワードは「ていねいに生きる」ではないでしょうか？麻生区のシニアライフのモデルになりましょう。

特集

菅の船頭小屋

わずか一坪に凝縮された日本建築史

我らが街、川崎に「わずか一坪の名建築」があるのをご存知だろうか？

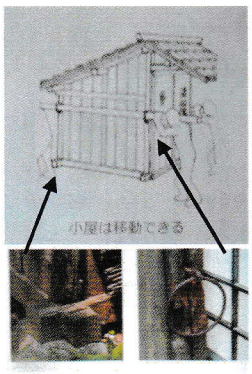
それが「菅の船頭小屋」なのである。名だたる建築家にして建築史家でもある藤森照信氏をして「見る都度に発見があり、見飽きない、すなわち名建築」と言わしめている。

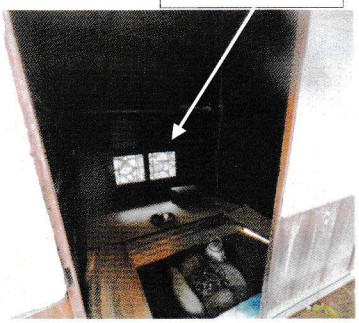
この小屋は、実際に「菅の渡し場」で船頭が客待ち、川の見張りなどに使っていた小屋で、昭和四年に建築されたもの。今は向ケ丘遊園の市立日本民家園に保存されている。

なぜわずか一坪のこの小屋が名建築なのか？以下に氏の解説を引用しよう。

「人間は起きて半畳、寝て半畳」渡し船の船頭さんは、畳に寝、起きると畳に腰掛けて土間の炉の鍋をつつき、湯を呑み、客が来るまでの一刻を一人で過ごしたと思うだろう。でもそれは十分な理解ではない。「一刻を一人」は間違いで「一刻を三人」が正解。

半坪の土間が三つに分かれ、中央には炉、そして両側には板がかけ渡され、、二人の客か船頭仲間も座ることができる。人間は三人集まると社会が生まれるという。寝転ぶ畳の横の壁には小さな引き戸が開いていて、開ければ、多摩川の水の勢いや対岸の客の集まりを観察できる。渡しに関わる全てはこの一坪の中で成されていたのだが、実は、それ以上に忘れてはならない作りが外の壁にはあって、鉄の輪が左右に二つづつ付いている。洪水のとき、棒を通し、お神輿のようにして河原から土手の上へと移動した。河原は一時の立地だったのである。





半坪の土間が三つに分けられている

唐突に述べるが、人間の住居、というか人類の住まいの原型について、私は一つの説を持っている。まず火があり、火のまわりに人が集まることで一つの場が生まれ、その場が住まいの原型となる。次に場を風雨から守るため、火と人を覆う簡単な囲いが作られ、この仮の囲いが住宅建築の原型となる。まず火、次が囲い。この住まいの原型の条件を菅の渡しの小屋は見事に満たしている。火と仮の囲いの二つによって人類の住まいの条件を満たすばかりか、畳と障子の二つによって日本の住まいの特質もシンボリックに表現し、そしてさらにもう一つ、日本の住まいを考えるとき忘れてはならない軒も体現している。障子の前に張り出す軒が作る軒下の空間(庇)は、室内と室外をヨーロッパのようにカッチリ分けるのではなく、内と外を連続的に繋ぐ。雨や夏の日射を防ぐのにも都合がいい。わずか一坪の中に、人類の住まいの原型から室町時代に完成する日本的な作りまでが含まれている。誰も注目しないが名建築、というしかない。

次に撮影を担当した写真家藤塚光政氏の解説を紹介する。

鴨長明の方丈庵は「丈」が約3㍍だから、一辺3㍍角、つまり約9平米の空間で暮らしたことになる。この「船頭小屋」は3・24平米、面積はおよそ3分の一である。確かに「船頭小屋」は暮らすための空間でもないし、精神空間でもない。でも、どうしてこの素朴な極小建築にこうも心惹かれるのだろう。この小屋内に身を置くと、空間の全ては主に属し、きわめて狭い空間がかえって思考を広げ、やがて一点に収斂していく思弁装置のようだからではないか。

（以上は藤森照信、藤塚光政共著「日本木造遺産」《発行・世界文化社》からの引用である）

みなさんも日本民家園に足を運んでぜひご覧あれ！